

先駆的学習支援部門報告

境原三津夫, 平澤則子, 菊地美帆, サイモン・J・エルダトン
新潟県立看護大学看護研究交流センター 先駆的学習支援部門

先駆的学習支援部門は、看護・医療・福祉分野の実践や研究に関する新しい知見やトピックスについて、広く国内外の権威ある知識人を招聘し、公開講座やシンポジウムを開催することにより、地域住民の方々に学習機会を提供するべく活動している。今年度は、2回の市民公開講座を開催し、本学における地域貢献活動のひとつとして地域住民に認識されつつある。第1回目は、「地域医療を守る—健康・病気・余命を考える」と題して新潟労災病院院長の松原要一先生、そして第2回目は「ハトムギで健康生活」と題して金沢大学大学院医学系研究科臨床研究開発補完代替医療学講座の鈴木信孝教授を迎えて、市民向けの公開講座を行った。両公開講座ともに参加者に好評であり、今後も継続を要望する声が多く聞かれた。

平成 22 年度市民公開講座

1. 第 1 回市民公開講座

- 【講師】 新潟労災病院 院長 松原要一 先生
【テーマ】 地域医療を守る—健康・病気・余命を考える—
【日時】 平成 22 年 9 月 18 日(土) 13:00-15:00

【講師紹介】

昭和 44 年に新潟大学医学部を卒業し、焼津市立病院に勤務。その後、母校の新潟大学医学部に戻り、第一外科助手、第一外科講師を歴任し、大学において診療と教育および研究に従事。平成 4 年に新潟県立吉田病院に外科部長として赴任し、平成 8 年には診療部長になり、診療の傍ら病院経営にも尽力した。

平成 11 年、鶴岡市の中核病院である鶴岡市立荘内病院の院長として招かれ、病院の再建を託された。老朽化した旧病院の新築移転を行い、新病院の病院経営を軌道にのせ、さらに地域の診療所との連携を強化することにより荘内地域の医療崩壊を食い止めた。その活躍は平成 22 年 3 月 31 日付の朝日新聞「ひと」欄に取り上げられている。この経験を是非上越の地でも生かして欲しいと、平成 22 年 4 月に新潟労災病院に院長として招かれ、現在に至る。

【講演内容】

上越市を中心とする人口約 27 万人の上越地区は、基幹病院の新潟県立中央病院と厚生連上越総合病院および新潟労災病院の 3 病院が中心となり、地域医療を担っている。25 年以上にわたる医療行政の失敗と無策の結果として、十数年前より医療費抑制と医師不足が顕著となり、わが国の医療崩壊が、特に地方の病院医療において進行している。地方によっては既に重大な社

会問題となっている所もある。医療は一度崩壊すると、回復はきわめて困難である。そして、その回復には十年単位の年月がかかるため、回復途中で地域社会そのものが消滅するリスクがある。上越地区の医療体制は今のところ何とか持ち堪えているが、その崩壊を招かないためにはさらに地域全体で努力する必要がある。すなわち、地域住民は病気になる前に病気のことを考え、医療を受ける前に医療の仕組み（医療制度）や地域医療機関の実情を知らなければならない。

一方、医療機関は、その機能・役割を認識し、内ではチーム医療を、外では病院と病院、病院と診療所、診療所と診療所の地域医療連携（病病・病診・診診連携）を積極的に進めることが必要である。何故なら、病院においてひとつの部門が崩壊すると、それはやがて病院全体の崩壊につながっていく。そして、地域におけるひとつの病院の崩壊は、他の医療機関に連鎖的に広がって、最終的に地域医療そのものが崩壊する。

地域医療連携が地域医療の崩壊を防ぐ唯一の方法であるが、この医療連携は容易ではない。医療連携で重要なことは、患者さんの医療情報（検査データや治療方針など）を共有することである。それには、顔の見えるヒューマンネットワークと情報ネットワークが必要であり、その鍵は ICT (information communication technology) 化にある。上越地区の医療崩壊を防ぐには ICT 化は必須であり、その推進に向け努力をしているところである。

2. 第2回市民公開講座

- 【講師】 金沢大学大学院医学系研究科臨床研究開発補完代替医療学
特任教授 鈴木信孝 先生
- 【テーマ】 ハトムギで健康生活
- 【日時】 平成23年3月5日(土) 13:00-15:00

【講師紹介】

昭和56年に防衛医科大学校を卒業され、金沢大学医学部産科婦人科学講座に入局されました。その後、恵寿総合病院産院院長を経て、平成5年金沢大学医学部助手、平成6年には金沢大学医学系研究科講師となり、平成16年に臨床研究開発補完代替医療学講座教授になりました。平成11年よりハルビン医科大学客員教授を併任し、平成13年からは日本補完代替医療学会の理事長をされています。先生は、補完代替医療の中でも特に各種機能性食品・植物性医薬品の臨床研究を専門とされています。

【講演内容】

補完代替医療は、アメリカのみならず我が国でも近年急速に脚光をあびている医学分野であり、Complementary and Alternative Medicine (CAM) (補完代替医療) という用語が使用されている。また、最近米国では統合医療 (integrative medicine) という言葉も使われるようになってきているが、我が国では未だ馴染みが少なく、統合という言葉そのものに戸惑いを抱く臨床医が多い。

そもそも代替医療とは西洋現代医学領域において、科学的未検証、臨床未応用の医療体系の総称であり、補完とは『西洋現代医学を補う』という意味であり、あくまで西洋現代医学を機軸としたのである。「なぜ今、一般人・患者は補完代替を求めるのか」については、以下の6つの点が挙げられる。

1. 代替医療は親しみやすく、自然的で、非侵襲的なものが多い
2. 伝統的医学やいわゆる自然医学に関心を寄せる人が多くなり、人気も高い
3. 「自分の健康は自分で守りたい」という患者の希望
4. 疾病の治療だけではなく、健康の増進法や疾病予防法を求めている
5. 身体のみならず心や精神の健康を求めている
6. 西洋現代医学が患者の気持ちに十分に答えていない

補完代替医療とは具体的には、ビタミン・微量元素等のサプリメント、薬効食品・健康補助食品（抗酸化食品、免疫賦活食品など）、ハーブ療法、アロマセラピー、中国医学、鍼灸、指圧、気功、インド医学、食事療法（玄米菜食など）、磁気治療、免疫療法、精神・心理療法、温泉療法、芸術療法、音楽療法等々すべてを包含している。さらに、保険外の先進的な医学診断法も含まれる。近年、新聞、雑誌、テレビ、インターネットをはじめとする高度情報化の情勢もあって、これら代替医療を求める患者がわが国でも急増している。

ハトムギ (Coix seed, Adlay, Job's tears : 学名 *Coix lachryma-jobi* L. var. *ma-yuen* (ROMAN.) STAFF) はイネ科ジュズダマ属の一年生草本でモチ性の子実（穎果）を有している。ムギという名ではあるが、分類上はトウモロコシの近縁にあたる。

ハトムギは茶褐色の比較的硬い殻（総苞）とその内側に薄茶色の薄皮（護穎、内外穎）に包まれた子実とからなる。子実の胚乳は白い。ヨクイニンとは、ハトムギから殻、薄皮を除き、子実を乾燥させたものを言い、「日本薬局方」に記載され、古くから漢方生薬の一つとして用いられている。したがって、ヨクイニンという名称は、薬名であり、食品にヨクイニンという名称をつけることはできない。ハトムギは中国の『神農本草経』の中に収載され、「筋急拘攣、不可屈伸、風湿痺、下気を主る」と記され、漢方ではヨクイニンを消炎、利尿、鎮痛、排膿の目的で、浮腫、リウマチ、神経痛などに用いてきた。また、民間ではハトムギの煎汁の内服または外用が疣取りに有効であるとされてきた。

現在、われわれの教室では、ハトムギの殻、薄皮と渋皮の薬効に注目し、その発酵抽出物をヒト乳頭腫ウイルス性疾患の予防または治療剤に応用する研究を行っている。さらに最近では、各種皮膚疾患に対する作用も検証しはじめた。